

国内研修レポート

今回、京都に本社を構える株式会社リアル様への訪問を通して京都の景観づくりとその中で活動するホテル事業、そしてそこに住む人々との関係性に関するお話を詳しく伺うことが出来た。リアル様は主に京都の景観を大切としながら、そこに合う風情、景観、雰囲気壊すことなく新たな宿泊施設を作ることによって京都の観光事業の一端を担う活動を展開していた。その活動は多岐にわたり、元の会社自体が不動産事業であったという利点を生かしたコネクションを利用した利用者のいなくなった町屋や所有者から託された空き家などのリノベーションから、日本人観光客から外国人観光客まで様々な宿泊する人々のニーズにこたえる COOL×JAPAN を取り入れるような洗練されたデザインブルな室内の構想、中期～長期出張のような利用客への単身者向け家具の取り揃えなどホテル事業として構想やプロデュースから着手、そして事業展開、運営までをひとつの会社で成り立たせている。

そんなリアル様のお話を伺っていた際、印象に残った点が2つほどある。一つ目がホテル事業者としてのリアル様と、京都に住む人々との関係性である。ホテル建設の際、一番初めに懸念しなければならない事柄とは何であろうか。資金的問題か、立案者の人柄か。私はその土地に古くから住んでいる人々の民意であると思う。誰がその地を見守ってきたのか、誰がその土地のことを一番知っているのか。それは間違いなく地元の住人達であろうことは明白だ。だからこそ我々にお話をしてくださった担当の方が「地域とのつながりを大切にし、物件を立てる前には必ず説明会を行い、ひとりでも否を唱える方がいらっしゃるのなら賛同を得られるまでは話し合いを続けています」とおっしゃった際にはひどく感銘を受けた。地域住民への説明義務すら蔑ろにしてしまうようなこともたびたび問題とされる現代で強行突破は絶対に無いと言い切れることにリアル様の強い心意気を感じ受けることが出来た。エリア内の人々に安心してもらえる事業と町との関係性だけでなく、信頼を築くまでのプロセスが実に丁寧で、かつ地道ではあるものの確固たる足取りを持って地域に根付くことを可能としていたように感じられたからだ。

私には何人か関西地方出身の友人がいる。今回のレポートを書くにあたって京都の人々の府民性についていくつかの質問をした際に口を揃えて言われたのが伝統を重んじる傾向があり、古きを愛し新しきを拒みがちである性質であるということだった。ステレオタイプなイメージではあるかもしれないのだが、地元のすばらしさ、自らの出身地に対する観光地としての自負の高さが新しいものに対する拒絶を生み出すのではないかと考えられる。そういった府民の方々との関係性を築くにあたり根気強く、粘り強く新たな事業におけるメリットについて話し合いを交わすという姿勢はこれからのまちづくりという事業を担うものにとって大きな必要性があるものなのではないかと考える。

次に京都市としての事業であること、という事柄を前面に出す形で活動されていること

にも感銘を受けた。京風町家の素材を生かしつつ現代に適応することの出来るリノベーション物件を売りとする会社であるため、主に客層のターゲットは外国人の方々であり、実際に来てくださる方々も八割方が外国人の方、最近では東南アジア諸国からのお客様も多いという。そのような海外のお客様が日本に来ることで求めるのは伝統的な京文化の礎を自身の身近として感じられることであり、宿泊というイベントを通して京文化を疑似的に間接体験することである。そしてその間接体験の最も大きな部分を占めるのが宿泊施設の趣加減なのではないだろうか。京都らしくあることを重視するということが出来るのは京都府で展開している事業でだからこそ出来る強みであると思われる。自分の手で街を作ることはその街の利点をどのように活用していくか、そして他人に対してどのようにして、その街の側面を見せるかということでも強くと強く感じた。町家という資材を利用し、京都という土地の世界観に溶け込むことで観光客を非日常へといざなうことに繋がっている事業体系である。

このようにリアル様の話の中では我々が聞きたいと思うこと、知りたいと思うことで行動しなければ得られない様々を得ることができた。以上の他にも様々な話を聞くことができ、これから先の事業展開についてなどでは飲食などの提携先はあるものの、宿泊業のみで現在は活動をしているため自社のみで全てが賄えるシステムの先駆けとして飲食に力を入れたい、というような更に事業の幅を大きく多方面に展開したいというものと、地域の人々に許してもらってここに有るということをお忘れずに、地域の方々との交流イベントや近隣小学校との歴史を赴く、繋ぐようなつながりを持っていきたいという強い思いを語って頂けた。昔からあるものを今という時間軸に捕らわれることなく未来へつないでいく。今の小学生たちに京文化を町家という身近な視点から触れる機会を与えること、そうすることで興味という輪を更に大きく広げていくこと。そんなもっと先を見越した再生可能社会に重点を置いた視点での活動展開は我々現代福祉学部が基本理念とする Well-Being の考え方とも合致してくるようになると思われる。担当の方が取材の最後に「共存と貢献」という考え方での活動理念をおっしゃっていたことから街を作る、動かす、ということの基本精神とは金銭目的というよりもそこに住まう人々とどのようにして共存し、そこに迎え入れられたことに対する貢献という一種の型を持つ人の心ありきで動いているのではないかと考えさせられた。

街づくりという柱からのスタートではあったものの、その活動が人々の心や様々な分野形成における大切な一つとして回っていることが再発見できたのもこの国内研修で得た学びの一つである。

まちづくりとは何か、そしてそれを基盤に経済を回していくとはどのようなことなのかということの間近で今現在になっている方から聞く機会を得ることができた貴重な経験であったように感じる。これをもととして、自らの学びや発展にさらなる良い刺激となるよう、邁進していきたい。